

森 の 哲 学

——南方熊楠の学問観の形成——

三 村 泰 臣*

(平成8年9月30日受理)

A Green Philosophy: Kumagusu Minakata and the Development of his Study Methodology

Yasuomi MIMURA

(Received Sept. 30, 1996)

Abstract

In recent years, we have come to realize that there will be serious problems in the future concerning the Earth's environment. The destruction of forests is regarded as particularly key to this problem. In order to solve the problem, this writer believes that we need to get to know well someone who had committed himself to protesting against forest destruction.

Kumagusu Minakata is a well known as an ecologist, having committed himself to the protest against forest destruction. This paper analyses the development of Minakata's study methodology through the first half of his life to point out some outlines of a Green Philosophy that has not previously been discussed. It was concluded that Minakata's study methodology was influenced very much by Konrad von Gesner, Gottfried Leibniz and Aristotle. Realizing this, the writer has pointed out some outlines of a Green Philosophy.

Key Words: Anabor, Aristotle, cosmology, man and nature, study methodology.

はじめに

地球環境問題は21世紀における人類の最も重大な問題として認識されている。とりわけ森林の減少にかかわる「緑の保護と再生」の問題は最重要テーマと考えられている¹⁾。こうした中で、「緑の保護と再生」を哲学の立場から論じることが徐々にではあるが活発化してくるようになった。1昨年7月の季刊仏教では「森の哲学」が特集され、NHK教育テレビでは「森林と人の共生」と題してこの問題が論じられた。そこで梅原猛は南方熊楠を「森の哲学者」と呼んだ。梅原は南方熊楠の活動や思想について何も論じていないが、神

社批判反対活動に尽力した南方熊楠の中に「緑の保護と再生」の問題を解く哲学が秘められていると直観したと思われる。

この小論では、南方熊楠を「緑の保護と再生」の問題を解くひとつの鍵として位置づけ、南方熊楠の学問観の形成過程を研究することによって「森の哲学」と称する新しい学問の輪郭を提示したい。まず最初に(1)南方熊楠のプロフィールを述べ、(2)南方熊楠の学問観を示し、(3)南方熊楠の学問観の形成に大きな影響を与えた旅の時代を眺め、(4)南方熊楠の学問観の形成について述べる。そうした上で、最後に(5)「森の哲学」の輪郭を示してみよう。

* 広島工業大学環境学部環境デザイン学科(哲学担当)

(1) 人間と自然の観察者

南方熊楠²⁾は、1867年(慶応3)に生まれ、1941年(昭和16)に75歳で亡くなった。20歳で米国に渡り、米国から中米・英国へと足かけ15年間に及ぶ旅をした。帰国後熊野の森に隠棲して思索を究め、37歳以後紀州田辺に定住して自らの学問研究を日本と世界に向けて発信し続けた。南方熊楠は柳田国男と協力して日本民俗学の設立に寄与した民俗学の祖、菌類・粘菌類の研究を行ない、昭和天皇へ進献・進講した偉大な生物学者でもあった。膨大な量の書簡類を残し、自然科学から人文・社会科学の多岐の領域にわたる学問を究めた。学者としての働き盛りに神社合祀反対活動に尽力し、神島の森を保護をするなど生涯を「緑の保護と再生」に捧げた。

南方熊楠は12歳までに『和漢三才図会』などの百科事典類を記憶して筆写し、和漢洋の書籍に通じていたと言われる。世界の中心地ロンドンでは英国博物館の嘱託として古今東西の文献を読破し、全52巻1万頁以上に及ぶいわゆる「ロンドン抜書」をものにした。10数ヶ国語に通じる語学力を備え、世界の学者を向こうに張って論争し、世界のトップクラスの科学雑誌『ネイチャー』に通算して50編、『ノーツ・アンド・クィアリーズ』には実に323編の論文を寄稿した。その内容は文理両面の多岐に及び、日本人の業績としては空前無比の盛事であった。柳田国男は南方の75年の生涯は「普通の人々の為し得ないことのみを以て構成されて居る」と言い、彼の内に「日本人の可能性の限界の更にそれよりもなほ一つ向かふ」のものが秘められていると評した³⁾。

一方南方と最も親交の深かったロンドン大学事務総長ディキンズは南方を「東洋と西洋に関するかくも深い学識を持ち、人間世界と物質世界の素直で公平でしかも私心のない観察者⁴⁾」と評している。このように南方熊楠は人間と自然のかかわりを地球的な広がりの中で考えそして生きぬいた「人間と自然の観察者」でもあった。

(2) 南方熊楠の学問観

南方は「勉強大好き学校大嫌い⁵⁾」と言われてきた。また官学嫌い・学者嫌い、さらには学会嫌いとしても有名である⁶⁾。幼少時代から学校に余り行かず、自分の好きな勉強に熱中し生涯その姿勢を崩さなかった。しかしこうした一見奇妙とも思える南方に態度の中に彼の強烈な学問観を窺うことができる。

南方は学問の真実は学校や書物の中だけにあるとは考えず、学校外の人びとの暮らしや自然の営みの中にあると考えていた。このような学問観は既に米国滞在中に醸成されていったもので、1887年に友人杉村広太郎に宛てたミシガン州ランシングからの書簡に示されている。

この学問なるものは三年や四年何の地に学びたりとて、天から鑑札が降るでもなく、鬼神が学位をくれるでもなきことゆえ、到底無益のことなり。ニュートンは常に級の下等にあり、スペンセル氏も学位なし、とそろそろ我田へ引くでもないが、何にせよ学問は一生暇あればすなわちと出かけるべきなり。いやな学問を無我無尽にやりとおして何の益かある⁷⁾。

このように南方は学問の真実はアカデミズムの権威や学説の中ではなくそれらの外にあると考えた。したがって、まず外に「出かけ」、そこそこに転がっている事柄を自分の目で見、耳で聞いて納得し、それを組み立てていくのが本当の学問であると考えた。野外に出て自らの足で尋ね歩き「生きたものを生きたまま⁸⁾」観察をすることこそ真の学問であるという学問観を一貫して持ち続けた。

したがって南方は自分を学者ではなく「独学者⁹⁾」とみなし、自分のことを好んで「維摩居士¹⁰⁾」と呼んでいた。維摩居士は『維摩経』によれば在家ではあったが出家の修行者が守る清浄な戒律をよく守り、在家の住まいに住みながらこの迷いの世界に執着することがなかった高僧とされている。また在野にありながら独学ではかり知れぬ知恵を習得し、当時のアカデミズムの中心であった仏教教団の高僧たちを議論において一蹴したとも言われる。南方熊楠はこのような維摩居士に自分自身の存在を重ね合わせ、野にあって野を超越し、独学によって人間と自然の奥義を究めることを学問の理想としたのである。

南方は学問の理想をそのように考えたので、彼にとって学問はおもしろくてたまらないものであった。当時誰も寄り付こうとはしなかった熊野の森にみずから進んで赴きそこで生物学の研究や思索を楽しんだ¹¹⁾。熊野の森から書き送った土宣法竜宛書簡にはこのような学問観がよく示されている。

宇宙万有は無尽なり。ただし人すでに心あり。心ある以上は心の能うだけの楽しみを宇宙より取

る。宇宙の幾分を化しておのれの心の楽しみとす。これを智と称することかと思ふ¹²⁾。

しかし南方は学問の楽しさだけを追い求めたわけではない。ロンドン時代に書き送った土宣宛書簡の中で「小生は何とぞ在家の菩薩となりて、一切世間に事をなしたし¹³⁾」とも述べており、かなり早い時期から学問は人びとに奉仕するものでなければならぬと考えていた。

以上のように、南方熊楠は学問は一生暇あれば「すなわちと出かける」べきものと考えた。また学問は「楽しむところ尽きざる」ものであり同時に「一切世間に事をなしたし」という理想でもあった。

(3) 南方熊楠の旅

このような学問観は果してどのようなきっかけによって形成されたのであろうか。この点を彼の前半生にスポットをあてて眺めてみよう。というのは南方熊楠の生涯は旅の時代と定住の時代の2つの時期に分けることができるが、彼の学問観は前半の旅の時代に形成され、次の定住の時代にはその学問観が実践に移されていったからである。旅の時代を、①学問観の基礎が芽生えていった「和歌山～東京」の時期、②学問観が次第に形成されていった「米国・中米の旅」、③学問観が固められた「ロンドン滞在」の3つの時期に分けて眺めてみよう。

① 和歌山～東京

南方は真言大日如来に対する信仰の世界を両親から与えられた。そのため幼少時の南方の心の中には声なきものの声を聴き、形なきものの形を観る柔軟な精神が形成された。南方は幼少の頃から知的好奇心に溢れていた。8、9歳の頃には、『和漢三才図会』をはじめ日本や中国の植物学に関する書物類、旅や民俗に関する書物類を読破し、12歳までにそれらすべてを写し取ったと言われる¹⁴⁾。人間や自然に関するテーマ、とりわけ民俗や生物に関心を寄せ、自分なりの方法で学習をはじめていた。本を読んでそれを筆写し、動植物を採集・観察しては整理していく作業を通して、南方は単なる和漢の知識だけではなく、人間や自然の間にあるつながりやすじみちに目を向けはじめるようになっていた。

『和漢三才図会』を筆写したことは南方の学問観の基礎が形成されるのに大きな影響を与えた。この書物は大阪の医師寺島良安が著した江戸時代の百科全書

で、三才、つまり天・地・人の3つの世界を和漢古今にわたって図入りで解説・考証したもので、東アジアの世界像を総合的に記述したものである。この105巻に及ぶ書物を筆写する作業を通して、天・地・人の中にある目にはみえないつながりのようなもの、いわゆる「世界観」(コスモロジー)と呼ばれるものに強い関心を抱くようになったと見ることができる。幼少時代の南方の内には、読書や採集・観察などの具体的なことがらを通して目にみえない統一的な原理を理解したいという飽くことのない知的好奇心が育っていった。そうした知的好奇心は次第に人間と自然の間にあるつながり、世界の真相を究める知的行為へと拡大していった。

予備門在学中は「授業など心にとめず、ひたすら上野図書館に通い、思うままに和漢洋の書物を読みたり¹⁵⁾」と言っているように、図書館で書物を読みふけり、大森や鈴ヶ森など東京周辺の縄文貝塚を歩き回っては土器、石器、人骨片、貝殻片などの採集・観察に熱中した。がらくた同然のものを採集・観察・整理し、それらの間に隠されているひとつの統一的な原理を探そうと苦闘していた。

② 米国・中米の旅

このような状態では学校生活がまともに勤まるはずもなく、予備門を落第して退学、その年の暮れにはアメリカに渡っていった。しかし南方の知的好奇心はアメリカの大学でも満たされず、東京時代と全く同じように「欠席すること多く、ただただ林野を歩んで、実物を採りまた観察し、学校の図書館にのみつめきって図書を写し抄す¹⁶⁾」という身勝手な生活を繰り返した。

1888年(明治21)11月、南方はとうとう学校にみきりをつけ、ミンガン州のアナバーという町に下宿して独学をはじめた。自分で編集した手書きの回覧新聞には「日中は沢を渉り林を徘徊して物性を極め、夜半は経を繻き蔵を転じて物心を覓む¹⁷⁾」と記しているように、日中は自然の中に参入し、夜半は書物の中に参入して人間と自然の間にある目にはみえないひとつのすじみちを探り当てようとただ一人で苦闘したのである。

アナバーに於ける独学の苦闘の中で最も印象的な出来事はスイスの博物学者ゲスネルとの出会であった。1889年(明治22)の或る寒い夜、彼はゲスネルの伝記を読み電撃で打たれたように彼の世界に魅きつけられてしまった。南方はその時の感動を10月21日の『日記』に次のように記している。

夜感有り、コンラード・ゲスネルの伝を読む。吾れ欲くは日本のゲスネルとならん。此夜寒甚し。夜五時過に至り臥すつもの所臥ず、エンサイクロペーディア・ブリタンニカを読む¹⁸⁾。

友人中松盛雄に宛てた書簡には、洋行後の自分を変えたのはゲスネルであったという告白に続いて「それからむちゃくちゃに衣食を薄くして、病気をしようずるをもかまわず、多く書を買って、神学もかじれば生物学も覗い、希拉もやりかくなれば、梵文にも志し¹⁹⁾と伝えている。ゲスネルに刺激された南方は、アナバーの下宿で当時最先端の学問であったダーウィンの進化論をはじめ、西欧古今の学問世界に無我夢中になってのめり込んでいった。

当時の日記には次のような決意が記されており、無我夢中で一人勉学に没頭する南方の姿が写し出されている。

1月17日 [金] 晴

終日臥蓐。此夜よりアリストートル、プリニー、ライプニッツ、ゲスネル、リンネ、ダールウキン、スペンセル及白石、馬琴の九名を壁に掲げ、自ら鑑み奨励するの一助となす²⁰⁾。

南方は古今東西の独学者9名を選び、その名前を下宿の壁に掲げ、彼らに倣って日夜学問に没頭していった。

1891年(明治24)から1年余り、フロリダからキューバ、中米への「とほうとてつものなき²¹⁾」旅に出かけている。フロリダのジャクソンヴィルでは、中国人の牛肉店に寄食して商売を手伝い「夜は顕微鏡を使って生物を研究²²⁾」する生活をつづけ、キーウエスト、ハヴァナへと移動し隠花植物や地衣類の採集活動をしている。

5年と9ヶ月の米国・中米の旅は南方が独学で学問に生きることを決意し、ゲスネルらに放ってなりふりかまわずにそれを実践した時期であった。この時期は南方の学問観が形成され方向づけられた最も貴重な時期であった。

③ ロンドン滞在

1892年(明治25)に南方はロンドンに渡った。大英博物館の囑託をしながら書籍閲覧室に籠り古今東西の150万冊近くに及ぶ文献の中から、人間と自然のつながりを明らかにすると思われる資料を、およそ5年半

の歳月をかけて大判ノート52冊に1万頁以上にわたって記録しつづけた。

「ロンドン抜書」と呼ばれるこのノートは9ヶ国の言語で記され、その半分以上は旅行記、探検記、地誌の類で占められている。たとえば世界を又にかけて旅をしたイブン・バツータの旅行記など、世界各地を自らの足で歩き、牧童や漁婦の言など人びとが無視してしまうような旅の記録や民俗・風俗の記録がスケッチを交えながら克明に記されている。人間と自然に関する広大な学問を構築しようとする南方の超人的気迫がこのノートの中に込められている。

「ロンドン抜書」を書きはじめた頃の1895年(明治28)の日記には、次のようなものが見られる。

五月二十日、二時過ぎより書籍室、七時迄。

五月二十一日、二時より七時迄書籍室。

五月二十二日、十一時十五分より七時迄読書室。

五月二十三日、一時四十五分より七時迄書籍室。

五月二十四日、十二時二十五分より書籍室、六時四十五分迄²³⁾。

5月頃に記されたと思われる次のようなメモが日記の見返し部分に残されている。

大節儉のこと。

日夜一刻も勇氣なくては成ぬものなり。

ゲスネルの如くなるべし。

大事を思立しもの他にかまふ勿れ。

嚴禁喫煙。

往時不追來時不説

[往時は追わず、來時は説かず]

禹は寸陰を惜む。

学問と決死すべし。

晩学如夜灯尚勝無之

[晩学は夜の灯の如し、なおこれに勝るもの無からん]²⁴⁾。

南方のロンドン滞在の8年間は「学問と決死すべし」と自らに誓いひたすら「ロンドン抜書」の作成作業に没頭した時期であった。柳田国男は南方の旅の時代は彼の学問にとって「無駄な仕事²⁵⁾」に費やされた時期であったと述べているが、この時期こそ南方の学問が最も充実して輝きを増しはじめた時期であった。

(4) 南方熊楠の学問観の形成

南方熊楠の学問観の形成には彼自身の資質や幼少時代の環境が大きな影響を与えたが、とりわけ米国ミシガン州アナバーにおける体験は彼の学問を決定づけたと言っても過言ではない。アナバー滞在の1890年1月17日の日記には9名の独学者の名前があげられている。彼らは自然科学、人文・社会科学を総合的に把握しようと試みた学問のバイオニア達であった。南方はアナバーにおいて彼らの学者としての姿勢、彼らの学問の方法や視点に共感し次第に傾倒していったものと思われる。そこで、この節では9名の中から、馬琴を手はじめに、①ゲスネル、②ライブニッツ、③アリストテレスについて紹介し、南方熊楠の学問観を示してみよう。

滝沢馬琴(1767~1848年)は江戸時代の読本、草双紙作者として知られている。彼は読書と旅を特に好み「男子家に在りては未見の書籍を閲んことをおもひ、旅にありては未見の山川に遊ばんことをおもふ」と述べている。また「人生宇宙間、志願当何如、不行方万里路、即読万卷書」、万里の路を行かなければ、万卷の書を読めとすすめている古人の詩を大切に保存している。旅をするかさもなれば読書を通して学ぶことが大切だと勧めた。南方は既に予備門在学中に馬琴の『騷旅漫録』を入手しており、既にその頃から旅することが学問と深くつながっていると考えていたのであろう²⁶⁾。

① ゲスネル

アナバーに於ける独学の生活で最も印象的な出来事はゲスネルとの出会であった。「乞食ごとき態」²⁷⁾で諸国を旅したゲスネルの伝記を目にした感動は、南方の生涯にわたる学問の姿勢と方向を決定したと言っても過言ではない。その出会いの感動は1889年10月21日の日記や1895年5月27日頃に記されたと思われる日記の見返し部分の記録によって窺うことができる。

ゲスネル(1516~1565年)は16世紀の偉大な学者で後の多くの博物学者に強い影響を与えた。チェーリッヒの貧しい毛皮商人の家に生まれた彼は、医師として活躍するかたわら古典語の研究にも携わった。彼は旅を好み、地中海沿岸部のアドリア海沿岸やアルプス地方の動植物を精力的に標本採集して歩き、その成果を『植物学大全』2巻、『動物誌』5巻の大著として後世に残した²⁸⁾。

ゲスネルは偉大な博物学者として世間一般では紹介

されている。しかし南方によれば、博物学者ではなくむしろ「貧究中に博学せし人」²⁹⁾として紹介されている。また『田辺通信』の中では「近代生物学の中興」で「ドイツのプリニウスと呼ばれた大博学の人」と紹介した後で「乞食ごとき態で諸国を走り廻り、牧童の話、漁婦の言すら蔑まらずに記し留めて実否を試した」³⁰⁾点を強調している。ゲスネルはアドリア海沿岸やアルプス地方の海や森を旅をしながら、当時のアカデミズムの常識からすれば蔑むべきこととされた牧童や漁婦の言を丹念に採集して歩いた。学問の真理は大学や書物の中にだけあると信じられていた時代に、諸国を走り廻り庶民の生活や心情、生きた自然の中に学問の真実を求め続けたゲスネルの姿勢に触れ、目から鱗が落ちる思いがしたのであろう。大学や書物だけに依存せず「暇あればすなわちと出かけ」「生きたるものを生きたるまま」捉えてその場で研究することが学問の真髄であると確信したのはゲスネルの姿勢を通してであった。「日本のゲスネルとならん」という寒夜の決意には、アカデミズムのぬるま湯につからないで、自らの足で旅をし、庶民の生活や自然の中に身を置いて真実を求めていこうとする南方の決意の程を窺うことができる。

② ライブニッツ

中松盛雄宛の1892年の書簡には「洋行後大いにわが行路を過たしめもの」はゲスネルに次いでライブニッツであったと告白している³¹⁾。また1894年のロンドンの日記には「ライブニッツの如くなるべし」³²⁾とも記しており、ゲスネル同様ライブニッツも南方の学問観に決定的な影響を及ぼしたものと考えることができる。

ライブニッツ(1646~1716年)はドイツの啓蒙思潮の先駆者で、自然科学、数学、法学、神学、言語学、歴史学の諸分野で業績を残し、外交官、技師としても活躍した。「百科全書」の生みの親としてもよく知られている。主著『单子論』を残しデモクリトスの原子論やデカルトの機械論を批判している。

ライブニッツによると、物質はいくら分解してもアトムのような単体の構成物質に還元されるものではなく、やはり同じだけの複雑な要素をもつモノド(单子)によって構成されていると考えた。世界は無数のモノドによって構成され、それぞれのモノドは力・心・生命を備えてそれぞれの仕方でも同一の世界を映している。ひとつのモノドには宇宙全体(マクロコスモス)が内蔵されている。各モノドは宇宙全体を表象する小宇宙(ミクロコスモス)で「宇宙の生ける鏡」である。

ミクロコスモスとマクロコスモスを構成するモナドは最高のモナドである神の意志によってのみ生成させられる。モナドには神が宿っていると言うのである³³⁾。

このように、ライプニッツは世界を巨大な機械と見たデカルト的世界像に反対して、世界を生命を持つ有機体、しかもそのあらゆる部分がまた有機体でもあるという世界像を提起したのである。宇宙万有をモナドによって構成されるひとつの巨大な生命体として理解したライプニッツの世界像に南方はよほど共感したと見え、柳田宛の書簡の中でライプニッツを「*doctor universale* (一切智)」³⁴⁾と紹介し賞賛している。ライプニッツは世界は延長を属性とする物体によって構成されている死物ではなく、モナドの充満している生き物と考えた。ライプニッツは世界はモナドより成り、おなじいのちを共有するひとつの生命体であると考えた。

幼少時より世界をひとつの統一ある全体として捉えようと目論んでいた南方にとって、世界をひとつの生命体として捉えたライプニッツとの出会いは、南方に世界の実相をとらえていくひとつの大きな指針となった。後の南方の粘菌研究をはじめ「南方マンダラ論」に見られるの生命観・世界観の基礎にはライプニッツの世界像が大きな光を投げかけているからである。

③ アリストテレス

アナバーの1890年1月17日の日記には、下宿の壁にアリストテレスの名前を真先に掲げ、自ら鑑み奨励する一助としたと記している³⁵⁾。彼がアリストテレスのどのような著作を読んだものかその詳細は明らかにされていないが、物事の本質を見抜くことに天才的な能力を備えていた彼には、アリストテレスの学問が明らかにしようとしていた核心を見抜くことはそう困難ではなかったと思われる。学問の方法論を探し求めていた時期であればなおさらのことである。

アリストテレス(前384~322年)はプラトンの弟子で、古代ギリシアの大哲学者としてあまりにもよく知られている。マケドニア王の侍医ニコマコスの子としてカルジキ半島スタゲイロスに生まれ、17歳でアテナイに出てプラトンのアカデメイアに学び、師プラトンから多大の影響を受けた。前336年頃、アテナイの郊外にリュケイオンと呼ばれる学校を設立し研究に専心した。その学徒はペリパトス学派と呼ばれた。かつて個人教授をしたこともあるアレクサンドロス大王が没し、アテナイに反マケドニア運動がもちあがったためカルキスに隠退し翌年この世を去った。

アリストテレス哲学の中で、とりわけ『自然学』や『形而上学』などは後世の哲学に多大な影響を及ぼしてきた。そのために、アリストテレスが『動物誌』や『動物部分論』など生物に関する多くの著作を残した自然科学者でもあったということはしばしば見落とされがちであるが、彼は科学者として、動物の発生、分類、解剖、生態などにも大きな業績を残した。また原子論に反対してエンペドクレスの説を受け継ぎ、万物は4元素(土、水、空気、火)からなるとし、天体は地球のまわりを同心円状に円運動をすると考えた。彼は人文・社会科学と自然科学とを総合したという点で抜群の思想家であったと言うべきであろう。

アリストテレスはアテナイのアカデメイアに学んだが、師であるプラトンの思想を完全に受け入れることができなかった。彼は自分に納得のいくものを求めて師プラトンのもとを去り、小アジアやマケドニアの各地の海や森を旅し、人びとの生活の機微に触れながら自然の観察を続けた。その後アテナイに戻り、小アジアやマケドニアでの体験や採集してきた資料を手掛りにしながら、世界を統一的に理解しようと試みかの一大学問大系を構築していったのである。

彼は学問というものには自然物の調査であれ、倫理・政治の研究であれ、まず個々のもの、つまり「パイノメナ」(*τὰ φαινόμενα*)から出発しなければならないと主張した。パイノメナとは(1)「観察された事実」という意味の他に、(2)「世上一般に行われている見解」(*ἐνδόξα*)、(3)「ある問題について主張され考察されている学説」(*ληγόμενα*)、さらに(4)「ある言葉が用いられる際の指示・用法」など多くの意味を含んでいる。この多義的な意味のパイノメナを学問の出発点とするべきことを彼は強く訴えている³⁶⁾。

アリストテレスが学問の出発点とみなしたパイノメナは、われわれの経験においてよりよく知られるところのもの、個々の具体的なもので、それをアリストテレスは「われわれにとってより先のもの」(*πρότερον πρὸς ἡμᾶς*)と言っている。まずそれを出発点にして「本性上先なるもの」(*πρότερον τῆ φύσει*)へと進む有機的な運動こそアリストテレスが求めた学問の方法であった³⁷⁾。それは形あるものの形をみることから始めて、形なきものの形をみるという探求のプロセスとも言えよう。具体的なことから出発して、それらの間にあるつながりを全体的・統一的に究めるということである。アリストテレスはパイノメナを手がかりにしながら、人間や自然の中に隠されている物と物とのつながりやすじみちとその原因を考察し、それを『自

然学』や『形而上学』の中で体系的に論じたのであった。

アリストテレスがたどり着いた結論というのは、煎じ詰めれば、個物は明らかに存在しており、しかもそれは運動・変化しているという全く明白な事柄であった。しかも、それぞれの個物には運動・変化をひきおこす原因があるという発見であった。森羅万象は「第一動者」とのつながりにおいて、存在し、運動・変化しているのだという発見だったのである³⁸⁾。

こうした結論は、アリストテレスがマケドニアから小アジアの各地を旅することによって得た人間と自然に関する生きた資料、つまりパイノメナを基礎にして導かれたものである。ついでに述べておくと、アリストテレスの学徒はペリパトス学派とも呼ばれている。ペリパトスとは回廊を意味してつけられたものと言われているが、「ペリ・パテオー」(περιπατέω)は歩き回るという意味でもあり、アリストテレスの学校には、ゲスネルと同じように「諸国を走り廻り、牧童の話、漁婦の言すら蔑まずに記し留めて実否を試した」という歩く学問の気風のようなものが窺えるのである。パイノメナを学問の出発点に据えるということは旅を事他重視するということになろうか。

パイノメナから出発して「本性上先なるもの」(πρότερον τῆ φύσει)を探してみると「万物は存在し変化・運動している」³⁹⁾ということが明らかになったのであった。このことを理論体系化しているのが「質料形相論」にはかならない。ここでは述べないが、南方が「南方マンダラ論」と呼ばれる一大思想の中で取り扱っていることは、アリストテレスに倣ったことか、万物が存在し変化・運動しているというそのひとつのことがらを大乘仏教の哲理に基づいて論じたものなのであった。南方熊楠はアリストテレスがパイノメナを学問の出発点にし、そこから世界のすじみちを統一的に理解していく方法論にいたく共鳴したに違いない。南方は、アリストテレスの学問の方法に触れ、パイノメナを重視しながら目に見えるものから目に見えないものへ、そして人間と自然とのつながりを統一的に理解していく学問を構築していく可能性を探りはじめた。

学校生活を棒にふるってしまうまでに南方を追い詰めていった知的好奇心に対して、ゲスネル、ライブニッツ、アリストテレスの学問がやっと答えてくれると南方は認識したのであろう。アリストテレスをはじめ9名の名前をアナバーの下宿の壁に掲げ、自ら鑑み奨励し長年にわたって探し求めて来た学問の世界にのめり

込んでいった。米国から中米へと旅をし、世界の中心地ロンドンで学問と決死しながら「自分の学問」⁴⁰⁾を具体化しはじめたのである。

(5) 森の哲学

世界を股にかけて大遍歴の旅をし、紀州田辺の辺境で示寂するまでの75年間、南方熊楠は誰にへつらうことなく自分の学問をただひたすら求め続けた。南方熊楠のその学問を「森の哲学」と呼ぶとすれば、これまで述べてきたことから森の哲学の幾つの特徴を描いてみる事が可能である。

まず南方の学問は人間と自然に対する飽くことのない好奇心が原動力になっていた。南方熊楠はそれこそ微小な粘菌から壮大な仏教の哲理に至るまで、牧童や漁婦の言から全世界の人びとの民俗に至るまで何にでも興味を抱いた。彼の関心は多方面に及んだ。このことから、まず森の哲学は好奇心に支えられている学問ということができよう。

南方はアメリカから中米、ロンドンへと15年に及ぶ旅を続けた。旅は南方の学問に驚くほど深く関わっている。南方は自分の足で経験し、体験し、観察し得たものを学問の出発点とした。旅を通して人間や自然についての生きた情報を得ることを大事にした。「学問は一生暇あればすなわちと出かけるべきなり」と述べているように、森の哲学は旅をすることと切り離せないものである。

南方はアリストテレスが人間や自然の中に隠されている物と物のつながりやすじみちとその原因を考察するための出発点としてパイノメナを取り上げたことに共感して自分の学問の方法を築いていった。このことは、南方の実証的精神を裏付けるものであり、森の哲学が実証的な学として位置づけられることを意味する。

南方は人間と自然のつながりを明らかにしていくことを生涯に渡って求めつづけた。世界を部分的な集合体としてではなく、ひとつの統一した全体として捉えようとした。その意味で森の哲学は統一的・総合的であり、その意味でひとつの世界観を求める学と言いうことができる。

森の哲学の特質を色々述べたが、南方の学問はつまるところおもしろいからやるということに集約されている。南方にとって学問は無尽無究の大宇宙を知る楽しみであった。森の哲学は人間と自然の営みを観察し楽しむ学問である。森の哲学は「楽しむところ尽きざればなり」⁴¹⁾と呼ぶことのできる学である。

今回は扱わなかったが、南方の生涯の中で「神社会

「祀反対活動」は中心的な出来事であった。この活動は、南方が熊野の森で自分の学問である「南方マンダラ論」を完成させた直後にはじめられたもので、彼の思想と表裏の関係をなしている。このことから南方の学問は行動と深く結びついているものであり、森の哲学は行動の学として位置づけられるものである。南方は「小生は何とぞ在家の菩薩となりて、一切世間に事をなしたし」⁴²⁾と述べているように、森の哲学は人びとに奉仕するという理想を掲げる学問でもある。

おわりに

この小論では南方熊楠の学問観とその形成過程を主として取り扱うことにより、「森の哲学」のおおよその輪郭を示したつもりである。しかし肝心の「森の哲学」の内容には一切立ち入らなかった。彼の生涯で最も重大であった「神社祀反対活動」およびそれを支えた「世界観」がどのようなものであるかについては扱わなかった。この両者を議論することによってはじめて「森の哲学」の内容を十分に示すことができ、ひとつの学問として提示することができる。その点については時を改めて考察してみたいと思う。

文 献

- 1) 石弘之『地球環境報告』岩波新書, 1988年, 254頁.
- 2) 本稿作成に関して、笠井清『南方熊楠』吉川弘文館, 1967年, 鶴見和子『南方熊楠』講談社, 1981年, 松居竜五『南方熊楠一切智の夢』朝日新聞社, 1991年, 中沢新一『森のパロック』せりか書房, 1992年を参考にした.
- 3) 飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠百話』八坂書房, 1991年, 381頁.
- 4) 松居, 前掲書, 246頁.
- 5) 鶴見, 前掲書, 117~121頁.
- 6) 『南方熊楠全集』第8巻, 平凡社, 1972年, 51頁, (以下平凡社版『南方熊楠全集』は、『全集』と表記する). 『全集』第7巻, 208頁.
- 7) 『全集』第7巻, 88頁.
- 8) 『全集』第6巻, 175頁.
- 9) 雑賀貞次郎『追憶の南方先生』紀州政経社, 1976年, 13~14頁.
- 10) 『全集』第7巻, 205頁.
- 11) 同上, 28頁.
- 12) 同上, 329頁.
- 13) 同上, 164頁.
- 14) 同上, 7~8頁.
- 15) 同上, 8頁.
- 16) 同上.
- 17) 長谷川興蔵・武内善信校訂『南方熊楠 珍事評論』平凡社, 1995年, 98~103頁.
- 18) 『南方熊楠日記』第1巻, 八坂書房, 1987年, 224頁. (以下八坂書房版『南方熊楠日記』は『日記』と表記する).
- 19) 『全集』第7巻, 127頁.
- 20) 『日記』第1巻, 240~241頁.
- 21) 『全集』第7巻, 88頁.
- 22) 同上, 9頁.
- 23) 『日記』第1巻, 372頁.
- 24) 同上, 362頁.
- 25) 柳田国男「南方熊楠先生」, 飯倉照平編『南方熊楠 人と思想』平凡社, 1974年, 362頁.
- 26) 仁科悟朗『南方熊楠の生涯』新人物往来社, 1994年, 305~306頁.
- 27) 『全集』第6巻, 58頁.
- 28) Hans Fischer, Conrad Gessner Leben und Werk, Kommissinverlag Leemann AG, Zurich, 1966. (フィッシャー『ゲスナー』今泉みね子訳, 博品社, 1995年) 参照.
- 29) 『全集』第7巻, 127頁.
- 30) 『全集』第6巻, 58頁.
- 31) 『全集』第7巻, 127頁.
- 32) 『日記』第1巻, 362頁.
- 33) 小牧治編『哲学』有信堂, 1979年, 95~98頁.
- 34) 『全集』第8巻, 52頁.
- 35) 『日記』第1巻, 240~241頁.
- 36) G. R. Lloyd, Aristotle The Growth and Structure of his Thought, Cambridge University Press, London, 1968. (ロイド『アリストテレス』川田殖訳, みすず書房, 1973年, 49~50頁).
- 37) 『自然学』第1部, 第1章, 『形而上学』1029 b. 3~12, 『靈魂論』413 a. 11~29.
- 38) ロイド, 前掲書.
- 39) この内容については三村泰臣『アリストテレスの自然の形而上学』上智大学(修士論文), 1975年, 参照.
- 40) 『全集』第8巻, 52頁.
- 41) 『全集』第7巻, 356頁.
- 42) 同上, 164頁.